

京都フィロムジカ管弦楽団



第27回定期演奏会

2010年6月6日



京都芸術センター制作支援事業

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第27回目となりました。今回の演奏会は第18回、19回で指揮して下さいました、金正奉氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる交響曲を披露してくれるものと期待致しております。

本日の聴き所はベートーベンの師匠でもありました、ハイドンの交響曲第104番「ロンドン」です。「ロンドン」という題名の由来ははっきりしませんが、当時ドイツ人指揮者のヨハン・ペーター・ザロモンがロンドンに移住し、ハイドンやモーツァルトの交響曲を中心に定期演奏会を開催し、ハイドンの訪英の機会を作り、ハイドンは彼の為に「ザロモン・セット」と云われる12曲（第93～104番）の交響曲を同地で書きました。この中には「驚愕」「時計」「太鼓連打」と云った有名な交響曲がありますし、「ロンドン」は作品番号とは別の配列でザロモン番号が付けられているので、ザロモン交響曲第7番「ロンドン」となります。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました会員の皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

京都フィロムジカ管弦楽団の誕生日は1996年3月31日です。生まれた場所は古い小学校の体育館でした。当時同じころざしを持った若者20人が集まり、ベートーベンのエグモント序曲を演奏したのです。この曲は冒頭が全奏でしかも全員が同じ音(F)を出すという楽団の誕生にふさわしい曲でした。曲想のように苦しみから喜びへと進むフィロムジカはその歴史のなかで多くのことを学び成長しました。いまやブルックナーやマーラーを演奏しますが、決して誕生のときを忘れた訳ではありません。二年に一度は古典を取り上げ音楽の原点に立ち返り、そして自分を戒め、本当にこれでよいのかと問いかけています。きょうもそんな思いで演奏しようと思います。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- ・携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。
- ・演奏中の私語は固くお断りいたします。
- ・客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- ・補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- ・演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- ・「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

京都芸術センター制作支援事業

京都フィロムジカ管弦楽団 第27回定期演奏会

2010年6月6日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館

1:15～ プレコンサート

🌀 曲目 🌀

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト／歌劇『魔笛』より「序曲」
Wolfgang Amadeus MOZART (1756-91) : Ouverture zur Oper Die Zauberflöte

ヨーゼフ・ハイドン／交響曲第104番ニ長調『ロンドン』
Joseph HAYDN (1732-1809) : Symphonie Nr. 104 (7. Londner „Salomon“) D-dur
I. Adagio-Allegro II. Andante III. Menuet (Allegro) IV. Finale (Spiritoso)

— 休憩 —

芥川也寸志／交響三章
AKUTAGAWA, Yasushi (1925-1989) : Trinita Sinfonica
I. Capriccio II. Ninnerella III. Finale

指揮 金正奉

🌀 プレコンサート 🌀

モーツァルト (H. Dutschke 編) / 歌劇『魔笛』序曲

Hr.: 坂口、芦原 (俊)、草木、黒田

本編のコンサートで演奏する「魔笛」。高い音、低い音、細かいパッセージ…たくさんの楽器が集まって演奏する曲をホルン4本だけで演奏するとどうなるのでしょうか？ホルンはそんなに器用な楽器なのでしょうか？

…まずはちゃんと「魔笛」に聞こえることを目指します。(坂口)

ハイドン／弦楽四重奏曲第78番「日の出」

Vn.: 芦原 (靖)、山口 Va.: 吉川 Vc.: 小林

ハイドンは今回取り上げる交響曲以外に、多くの弦楽四重奏曲を残しています。その中から比較的親しみやすいこの曲をお届けします。(芦原靖子)

プーランク／ピアノ六重奏曲

Fl.: 江藤 Ob.: 坂田 Cl.: 田中 (慎) Hr.: 坂口 Fg.: 石塚 Pf.: 田村

20世紀に活躍したフランスの作曲家フランシス・プーランクによる、管楽器とピアノのための室内楽曲で、いかにもこの作曲家らしいわくわく感と哀愁の漂う旋律が同居する魅力的な六重奏曲で、木管楽器奏者にとっては一度は挑戦したいとおもう難曲でもあります。(田中慎一郎)

指揮者

金 正奉 (キム ジョンボン)



大阪音楽大学作曲科卒業。のちに同大学専攻科で1年間指揮の勉強をする。

卒業後、関西を中心に飯守泰次郎、広上淳一、本名徹次、現田茂夫、山下一史、大勝秀也、阪哲朗、牧村邦彦、金聖響氏の各氏らをはじめとして数多くのマエストロのオペラ・アシスタントとして活動。

団体としては、関西二期会、ザ・カレッジ・オペラハウスなどをはじめ数々のプロダクションに参加。

レパートリーの数はかなりのもの。

アシスタントだけでなく、喜歌劇学友協会では「カルメン」、「こうもり」、「メリー・ウィドゥー」を指揮。その他でも「ヘンゼルとグレーテル」、「フィガロの結婚」、「魔笛」、「夕鶴」他、主要作品の本番も指揮する。

管弦楽ではエウフォニカ管弦楽団などと定期的に音楽鑑賞会で指揮をしている。

その他アマチュアオーケストラの指揮もしている。

2001年、Wiener Musikseminarに参加し、ディプロムを得る。

作曲を田中邦彦氏、指揮をウィーン国立音楽大学の湯浅勇治氏をはじめとして金洪才、Ervin Acel各氏に師事。

曲目解説

Tp.遠藤 啓輔

モーツァルト／歌劇『魔笛』序曲

『魔笛』はモーツァルトのオペラの中でもとりわけ人気が高い作品で、「夜の女王のアリア」とははじめとして、誰もが知っている名旋律の宝庫である。ただし、オペラのストーリーは散漫で珍妙なものである。主人公が大蛇に襲われてすぐ気絶する、という物語の始まりからして先行きに不安を感じさせるものであるし、邪悪な悪魔（ザラストロ）が実は人徳者だった、醜い老婆が実は若い娘（パパゲーナ）の変装した姿だった、など無理矢理などんでん返しが多く複雑極まりない。こうした複雑さを捨象してストーリーの概略を抽出すると、「王子が数々の試練を乗り越えて王女を救出する」という実にありふれたものに落ち着いてしまう（ちなみに『魔笛』とは主人公の王子に与えられた魔法の笛である）。このようなストーリーにもかかわらずこのオペラが傑作として愛されているのは、何といてもモーツァルトの音楽の力による。とりわけオペラの場合、モーツァルトの音楽はその包容力が大きな魅力を放つ。悪役も含めて、あらゆる人物たちを愛情あふれる響きで包み込むモーツァルトの音楽が、変転めまぐるしいストーリーをまとめ上げているのである。

なお、このオペラはフリーメイソンの一員だったモーツァルトの作品の中でも、とりわけフリーメイソンの思想を反映していると言われている。モーツァルトの音楽とも関連することなのでこのことについて簡単に紹介しておきたい。フリーメイソンとは、もともとは石工（メイソン）たちが秘伝の技術を親方から徒弟へと継承するための相互扶助的な結社だったのだが、徐々に石工以外の人も加わって技術継承の場としての意味が薄れていき、人道主義を思想の基調として相互扶助精神を涵養する思想結社へと変容したものだそう。自分の人間性を向上させることを重んじ、それを象徴する「闇から光へ」の変化を演出した儀式を執り行うという。また、神を崇拜するが、エジプトのオシリス神や中東の預言者ゾロアスター（『魔笛』の登場人物「ザラストロ」の名は「ゾロアスター」にちなんでいる）をはじめキリスト教から見れば異教の神々も尊崇の対象とするらしい。こうしてみると、なるほどモーツァルトの音楽とフリーメイソンの思想は共鳴するところが大きい。モーツァルトの音楽は常に肯定的な明るさにあふれている。たとえ短調の曲であっても決して破滅的ではなく、希望を失っていない。人間性の向上を信じ、未来に光を見出そうとしているようだ。そして、モーツァルトの音楽は、文化や宗教の枠を超えて、あらゆる人々を愛情あふれる響きで包み込む。

本日演奏する「序曲」は『魔笛』初演の2日前に書かれたものという。オペラ全体が出来上がってから書かれた序曲だけあって、オペラの雰囲気をも的確に表現している。

冒頭、いきなり変ホ長調の和音（ミ♭・ソ・シ♭）が全楽器で温かく鳴らされ、早くも聴衆をオペラの世界に誘い込む。変ホ長調はフラット（♭）を3つ使用することから、3という数字を調和・均整の象徴として神聖視するフリーメイソンに好まれた調である。そもそも変ホ長調は、音楽史の中で愛や祈りを象徴する神聖な調として重視されていたのであるから、フリーメイソンでない人にも心に安らぎを与える響きとして届くことだろう。また、3本のトロンボーンがこの冒頭から使用されているのも重要である。トロンボーンはその落ち着いた深い音色から神の声を代弁する楽器として使用され、モーツァルトはレクイエムやミサ曲などの宗教曲にトロンボーンを使ったほか、『イドメネオ』などのオペラでは、神が登場する場面だけにトロンボーンを使用した（そのため、『イドメネオ』の上演に際しては一瞬の出番のためだけにトロンボーン奏者を3人揃えなければならない）。しかしこの『魔笛』では、序曲の冒頭から3本のトロンボーンが使用され、神聖な響きを強調する。つまり『魔笛』は、神聖さと愛情とに満ちた特別な作品である、ということを最初の第一音から宣言しているのだ。

冒頭からしばらくは、ゆったりとしたアダージョの序奏となる。揺り椅子に乗っているような心地よいリズム

と、包み込むような深い響きが、聴衆を夢の世界に誘うようである。兵庫県立芸術劇場で『魔笛』を上演した時、このオペラ全体を子供たちの夢の中の出来事である、という解釈で演出していたように見えた。この序奏の眠りの世界のような雰囲気に適った、面白い演出だと思う。

主部は短い音符が乱舞する快活な音楽に豹変する。弱拍にアクセントが入る意外性に満ちた旋律で、次なる展開に向けて聴衆の期待は否応なく高まっていく。また、『魔笛』という名に恥じず、フルートが美しくも少し謎めいた旋律を朗々と歌う。

主部がいったん完結すると、管楽器が「タ・ター・ター」という簡潔なリズムを3度演奏する。このリズムはフリーメイソンの儀式で叩かれる手拍子を模したものと言われており、また、管楽器はフリーメイソンの儀式で好んで使われる楽器だという。この作品がフリーメイソンの思想にもとづくものであることを、モーツァルトはここで明示している。この部分の響きは温かく滋味にあふれている。モーツァルトにとってのフリーメイソンのイメージもそのようなものだったのだろう。

このあと、再び主部の快活な音楽が始まるが、少し不安げな雰囲気に転調されるなど、提示部とは異なる表情を見せる。主人公に降りかかる数々の試練を象徴しているようだが、深刻さは微塵も無い。この物語は飽くまでも喜劇なのだ。主人公が試練を克服することで人間的に成長していくことを象徴するように、音楽は逞しさと威厳を増していく。そして最後は金管のファンファーレが鳴り響いて大団円を迎える。

ハイドン／交響曲第104番『ロンドン』

現在、交響曲はクラシックのコンサートの主役であるが、交響曲がこれほどまでの人気を獲得するようになった背景にはハイドンの活躍がある。そのため、ハイドンは今も「交響曲の父」と呼ばれ尊敬を受け続けている。もっとも、「交響曲」と題された作品のスタイルはロマン派以降、非常に多様になってきており、現代の作曲家にいたってはオーケストラのコンサートで主役を張れる曲であれば内容の如何と関係なく「交響曲」と名付けてしまう傾向も見受けられる（たとえばペンデレツキ作曲のオーケストラ伴奏付声楽作品『7つのエルサレムの門』は、大阪フィルが日本初演した際は交響曲と題されていなかったのに、DVDは『交響曲第7番』と改題されてリリースされた）。それでも敢えて「交響曲」の一般的イメージを抽出すれば、性格の異なる複数の楽章が組み合わせられた作品で、オーケストラで演奏され、テキストやストーリーを持っていないので予備知識無しで音だけ聴いても十分に楽しめる音楽、ということになる。この「交響曲」は、もともとはオペラやコンサートの開始を告げるために演奏される音楽であつたらしい。ちょうど、我々フィロムジカが開催しているプレ・コンサートのようなものだったのだろうと思う。このような脇役に過ぎなかった交響曲というジャンルにも巨匠ハイドンは傑作を書いた。ハイドンはヴィーンやドイツ、イタリアなどヨーロッパ各地の音楽を研究してその長所を止揚し、聴衆に愛される交響曲を書いた。そしてついには、ハイドンの交響曲に聴衆が熱狂し、新作交響曲が発注され、彼の交響曲を中心としたコンサートが開催されるまでになったのである。こうしてハイドンの活躍のおかげで交響曲はコンサートの主役の座に躍り出た。ハイドンは晩年にイギリスから多数の交響曲の発注を受け、そうして書かれた作品はいずれもロンドンの聴衆を熱狂させた。そうしたロンドンで初演された交響曲群の最後を飾る記念碑的傑作が、本日演奏する第104番『ロンドン』である。

第1楽章

いきなりフル・オーケストラがユニゾン（一斉に同じ旋律を演奏すること）で序奏の主題を演奏し、聴衆の度肝を抜く。5度音程の跳躍にリズムをつけただけの簡潔な主題だが、きわめて印象的なもので、のちにシューマ

ンはこの主題を自身の第2交響曲の冒頭に引用している。ゆったりとした序奏は徐々に不安の漂う神秘的な音楽になっていくが、快活な主部に入ると、喜びが炸裂するような明るい音楽に劇的に変化する。豪快に締めくくられるフレーズ、荒々しく吠える金管などに、土俗的な逞しさを感じる。ハイドンは30年以上の長きにわたってハンガリーの貴族のもとで音楽活動をしていたので、ハンガリーの民族音楽の影響を受けているのではないだろうか。コダーイやバルトークなど近代ハンガリーの作曲家と共通する大地に根ざした力強さが、ハイドンの音楽にも確実に存在する。

第2楽章

快活な第1楽章とは対照的な、ゆったりとした音楽で、典雅な装飾音符が花を添える。テンポ指定はアンダンテ（歩く速さ）なので、遅い中にも心地よい推進力があり、不意に打ち込まれる強音が楽しい驚きを与えてくれる。クライマックスでは、旋律と伴奏音形と金管のファンファーレがぶつかり合う壮絶な音楽に変貌するが、すぐに優雅な穏やかさを取り戻す。最後は、夢の彼方から聞こえてくるような柔らかなホルンの合奏で閉じられる。

第3楽章

3部構成をとるメヌエット（舞曲の一種）で、主部はハイドンらしい土俗的な逞しさを感じさせる。不意に挟まれる総休止に肩すかしを喰らわされ、弾いていても聴いていても楽しくなってくる。中間部（トリオ）は金管を使わない軽やかな響きで、豪快な主部と印象を異にする。このトリオで特に素晴らしいのは主部にダ・カーボする直前の部分である。典雅だった音楽が、一瞬だが神秘的で不思議な音楽に変貌するのだ。こうした小さな所にも鬼才ハイドンの恐るべき才能が見え隠れしている。

第4楽章

地鳴りのような低音から始まる。弱音の中から音楽の力が徐々に増大していくと、ついにはリズムが爆発するような生命力溢れる音楽となる。構成はソナタ形式を取るが、再現部が弱音でさりげなく始められるので、形式に詳しい聴衆にも「気が付いたら再現部になっていた！」という驚きを与える。茶目っ気のあるハイドンらしい、悪戯っぽい音楽だ。

このように、ハイドンの作品は様々な楽しみ方が可能な奥の深い音楽である。初めてクラシックを聴く人でも、豪快なリズムを楽しみ、典雅な旋律の美しさを愛でることができる。一方、音楽を相当に聴き込んだ人でも、意外性に富んだ仕掛けを楽しみ、時折顔をのぞかせる神秘性に驚くことができる。僕が高校のオーケストラ部でハイドンを演奏したとき、後輩が曲目解説に「噛めば噛むほど味が出てくるスルメや御飯粒のような音楽です」と書いていた。これほどまでに的確にハイドンの魅力を評した言葉を僕はほかに知らない。

芥川也寸志／交響三章

芥川は作曲のみならず、アマチュア音楽家の育成、放送メディアを通じての啓蒙活動などによって音楽の普及に尽くした、我々音楽愛好家にとっての大恩人である。僕自身、芥川の恩恵をおおいに受けた一人である。僕が音楽に興味を持ち始めたばかりのころ、芥川はテレビ番組『N響アワー』の司会者としても活躍していた。僕がニールセンに早くから興味を持つようになったのも、現代音楽を愛聴するようになったのも、まさにこの番組のおかげだ。そして、番組での芥川の発言で今も忘れられないのは、「コップがガチャンと鳴って、“これが音楽だ！”と言っていた時代はもう終わったと思いますね」というものだ。かく言う芥川は、楽器をコツンと叩く音を使って音楽を書いているのだが（『弦楽のための3楽章』）、その音は見事なまでに音楽の一部となって聴衆の心を打つ。

斬新な音を作るだけでは駄目で、その音が「みんなの音楽」として受け入れられるように使われていなければならない、ということだろう。

そしてなにより、僕が芥川から受けた最大の恩恵は、彼の著書『音楽の基礎』（岩波新書、1971）である。「静寂は人の心に安らぎをあたえ、美しさを感じさせる。音楽はまず、このような静寂を美しいと認めるところから出発する」という衝撃的な第1章で始まり、「積極的に聞くという行為、そして聞かないという行為は、つねに創造の世界へつながっている」と結ばれるこの名著の特徴は、なぜ音楽が人を感動させるのか、という素朴で難しい疑問と常に対峙している点だ。たとえば、芥川は「リズムなしには、音楽は生まれない」「リズムは音楽の基礎であり、音楽の生命」と断言するが、その理由を「心臓の鼓動に象徴されるように、リズムは生けるものしるし」と生命の根源にまでさかのぼって説明する。また、「フルートとトランペットの音色が、しばしば不思議なほど、そのオーケストラ全体の色彩を決めるものである」など音楽の現場を知り尽くした人ならではの指摘や、「音楽はどこへ行ったらいいのであろう？」という作曲家としての苦悩の告白も実に興味深い。

本日演奏する『交響三章』はこの書を著わす20年以上前の青年時代の作品だが、まぎれもない傑作だ。何より、リズムの魅力が炸裂している。規則的なリズムがもたらす安心感と、不規則に挿入される変拍子がもたらす緊張感が鋭く対立し、異なるリズムが同時に打ち込まれるポリリズムさえ聞かれる。こうした自由で奔放なリズムの饗宴が、先を予測させない爆発的な生命力を音楽に与える。このようにリズムが変転する一方で、形式的には「反復」と「対照」という西洋音楽の最も根源的で簡潔な姿を取っており、特に「急（第1楽章）-緩（第2楽章）-急（第3楽章）」というシンメトリックな3楽章構成は安定感がある。このように芥川は、『音楽の基礎』において述べる音楽の魅力を、23歳にしてすでに実践しているのである。

第1楽章

「カプリッチョ」と題される。疾走するような速いテンポで、いつ終わるともしれない息の長い旋律が、様々に楽器を換えて歌い継がれる。しかし伴奏がどっしりとしたものなので、決してスポーツカーのような軽快な印象は与えず、重戦車が猛スピードで迫ってくるような迫力がある。しかもこのスピード感は一様ではなく、時折ブレーキをかけるように打ち込まれる変拍子に足を取られる。この意外性が面白く、同じ旋律の執拗な反復であるにもかかわらずまったく飽きることがない。まさにカプリッチョ（奇想曲）と題されるにふさわしい。

オーケストレーションは簡潔な2管編成であるにもかかわらず、木管やヴァイオリンのソロ、打楽器やピアノを駆使して色彩感ある響きを作り上げる。芥川が幼時から愛聴したというストラヴィンスキイの影響が強く感じられる。

一瞬、第2楽章を予告するような暗鬱とした音楽が挿入されるが、再び快活な音楽へと戻り、最後は洒落な弱音であっさり終わる。

第2楽章

「ニンネレッタ」というイタリア語風の題がつけられており、「子守歌」と訳されるようである。ただし、子守歌に対して、親が子の安眠を誘うために愛情をこめてうたう歌、といったような認識をしては、この楽章に込められた重みを理解できないのではないだろうか。

現代以上に貧困が人々を苦しめていた時代、貧しい家の少女たちは、幼くして親元から離され子守奉公に出された。過酷な子守奉公と雇い主からのいじめに日々苦しめられる少女たちは、子守仲間同士で集まり、労働の苦しさ、雇い主への恨み、親を恋う気持ちを歌い合って自らを慰めたという。このようにして伝えられた子守歌には、挽歌や呪歌のようなものさえあった。そのような悲しく重い背景を持つ子守歌と同様に、芥川が書いた「子守歌」にも作曲者の悲愴な思いが吐露されていると考えて良いだろう。芥川は2歳の時に父が自殺し、第2次世界大戦では次兄が戦死した。早くに肉親を失った悲しみ、戦争で受けた苦しみ、こうした青年作曲家の半生の苦

悩が、この子守歌に表れているような気がしてならない。

シンメトリックな3楽章構成の中央に位置するこの第2楽章は、楽章自体も＜A - B - A＞のシンメトリックな3部形式をとる。主部（A）は優美でゆったりとした旋律が様々に楽器を換えて歌い継がれ、芥川が「リズムの世界の魔術師」と呼ぶシンコペーションの伴奏が程良い緊張感をもたらす。これに対し中間部（B）は、悲痛な旋律が緊迫感ある音色で歌われ、クライマックスではポリリズム的に打ち込まれる金管の伴奏が聴く者の心臓に突き刺さる。慄然とさせられるような恐ろしい音楽だ。この中間部の旋律には「Semplicemente e con malinconia」と表情指定がなされている。「シンプルに、そして哀愁をこめて」という意味になるだろうか。ただし、ここで「シンプル」の解釈が重要になる。「シンプル」は「単純に」ということでは決してないだろう。ニールセンやブリテンも「シンプル」と名付けられた作品を書いているが、それらはむしろ複雑極まる曲である。音楽において「シンプル」が意味するところは、「虚飾を排した」あるいは「穢れが無い、無垢な」といったことと考えられ、芥川のこの旋律もそのような性格を持つ。さらに芥川の旋律は、聴く者の心を直接に揺り動かすという点でも実に「シンプル」な魅力を持った旋律であると言えよう。作曲者の悲しみが包み隠さずに吐露された、類稀な名旋律である。

第3楽章

全楽器が明るい和声を力強く打ち込んで始まり、しなやかで颯爽とした旋律が次々と湧き上がるように反復される。第1楽章とは違って足を引っ張るものは何もなく、爽快に疾走する。変拍子も、この楽章では流れを阻害するものではなく、むしろ汗馬に鞭を入れるような効果をあげ、推進力が一層増大する。

第2楽章で休んでいた打楽器やピアノが再び大活躍する。したがって響きの密度は高くなるが、胃もたれするようなくどさは全くなく、むしろ爽やかで透明な印象を与える。『N響アワー』で「日本人作曲家の現代音楽の音はどれも澄んでいますよ」と発言した芥川の自信がのぞく。

コーダでは、後年の芥川が熱中することになるオスティナート（短い音形の執拗な繰り返し）のように音響が連打され、金管が上昇音形を一気に吹き上げて終わる。単純だが、それだけに聴く者の興奮を直接に喚起する、見事な終結である。

最後に、『音楽の基礎』の大好きな一節を紹介して、この解説を終えたい。

「一つの交響曲を聞くとき、その演奏が完結したときに、はじめて聞き手はこの交響曲の全体像を画くことができる。音楽の鑑賞にとって決定的に重要な時間は、演奏が終わった瞬間、つまり最初の静寂が訪れた時である。したがって音楽作品の価値もまた、静寂の手のなかにゆだねられることになる。現代の演奏会が多分にショー化されたからとはいえ、鑑賞者にとって決定的に重要なこの瞬間が、演奏の終了をまたない拍手や歓声などでさえぎられることが多いのは、まことに不幸な習慣といわざるをえない。」

【引用・参考文献】

吉田進『フリーメイソンと大音楽家たち』、国書刊行会、2006

石多正男『交響曲の生涯 誕生から成熟へ、そして終焉』、東京書籍、2006

芥川也寸志『音楽の基礎』岩波新書（青版）795、岩波書店、1971

渡辺富美雄・松沢秀介（編）『子守歌の基礎的研究』、明治書院、1979

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	横田 洋子様	辻 良治様
杉本 幸子様	吉田 育弘様	西 英子様
安藤 美知穂様	吉田 寛子様	浅野 節子様
稲村 董雄様	木下 清美様	福田 稔様
遠藤 時金様	西坂 壽美子様	金谷 一紀様
井谷 宏美様	松浦 淳司様	岡 喜久彦様
鎗本 和弘様	岡島 敦子様	山本 均様
谷口 佳隆様	小松 朋美様	
岡本 幸雄様	鈴木 一俊様	
信広 澄子様	谷村 暉様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(5月現在)

♡ 「友の会」会員随時募集中♡

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

- 【年会費】 1 □ 1,000円 【期間】 ご入会いただいた月より1年間
- 【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1 □につき1名様を無料ご招待
2. その他演奏活動のご案内
3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: tomo@kyotophilos.com

ご旅行は日本教育旅行で！！

各種旅行会社（JTB・日本旅行 etc）国内・海外
パンフレット取扱い可能！！
他にもスポーツ・音楽合宿、スキー旅行、団体旅行も
取り扱っております。

日本教育旅行株式会社

京都市下京区下数珠屋町通東洞院東入

TEL : 075-351-0405

<http://www.net-freeway.com>

担当 藤田 珠里

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727 (代)

FAX (075) 256-4604

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Violini

芦原 靖子
 小幡 拓也
 山口 陽平
 飯田 俊也◎
 大浦 一馬◎
 澤田 菜摘◎
 西谷 真彦◎
 西邨 奈穂◎
 吉川 正剛◎
 渡邊 達之輔◎
 青柳 和平※
 池田 純子※
 上山 瑞穂※
 大藤 千佳※
 岡田 美紀※
 下村 公美※
 堀井 亜紀子※
 山本 麻奈実※

Viola

西村 祐司◎
 吉川 昌毅◎
 岩井 英樹※
 上田 秀樹※
 江口 純子※
 森 静香※
 森園 博章※

Violoncelli

小林 豪
 多田 進
 塚田 毅◎
 波多野 文◎
 本田 哲郎◎
 木坂 有男※

Contrabassi

小道 信孝
 茂原 尚樹
 鳥山 拓
 藤井 輝之◎
 丸山 拓史※

Flauti

江藤 佳美
 海堀 梓
 吉澤 亮◎

Oboi

栗山 才子
 坂田 翔太郎

Clarinetti

安達 真未
 田中 慎一郎
 南井 菜穂子

Fagotti

石塚 有里子
 桃川 大毅※

Corni

芦原 俊平
 片山 真吾
 草木 美佐子
 黒田 直樹 JAMES
 坂口 裕志
 長岡 武志
 増田 亜由美
 吉野 文彦

Trombe

遠藤 啓輔
 作山 智
 竹内 恵理
 中西 美智子

Tromoboni

宮下 秀行
 馬瀬 英明◎
 前川 博志※

Timpani

横山 堅司※

Tamburo militare

岸田 麗※

Gran Cassa

北村 基之※

Pianoforte

田村 喜久子※

◎：団友

※：客演奏者

顧問

和田 之宏

団長

長岡 武志

事務

西村 浩 (事務局長)
 邑橋 明子

コンサートミストレス

芦原 靖子

弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第28回定期演奏会♪

2010年12月12日(日) 京都コンサートホール(大ホール)

ブルックナー/交響曲第8番・初稿

指揮：金子 建志

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿各府県に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。

「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス (弦楽器急募！！)

フルート(ピッコロ)・オーボエ・ファゴット・バストロンボーン・打楽器

※管楽器・打楽器はオーディションを行っております。

※コントラバスは団所有の楽器があります。楽器運搬に不安がある方はご相談ください。

〔練習日時〕 毎週日曜日 午後1時～午後5時 春と秋に2泊3日の練習合宿(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、および河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所

〔諸費用〕 活動費：3,000円/月 合宿費：15,000円程度 演奏会参加費：20,000～30,000円(学生は半額)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail：recruit@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。